

韓日発掘交流を終えて

私は国立慶州文化財研究所と奈良文化財研究所の発掘調査交流の一環として、2018年8月6日から9月28日まで、奈文研において複数の調査研究業務を体験する貴重な機会を得ました。

慶州で調査を担当してきた遺跡は新羅古墳でしたが、今年は東宮と月池内でも正殿と推定される大型建物跡を発掘してきたことから、奈良文化財研究所の調査内容と共通する部分があり、様々な点で良い経験となりました。

8月は、平城京内の法華寺南側区域の調査に参加しました。水が湧き出る低湿地という環境に全員が苦労しましたが、奈良時代の柱根や、木簡、曲物等の有機質遺物は、韓国ではなかなか扱う機会がないため、興味深いものでした。

9月に経験した藤原宮の調査現場も、大極殿院の北門・北面回廊と排水溝、およびそれ以前の遺構との複雑な重複関係をあきらかにする重要な成果に接する良い機会でした。特に、悪天候の中、現地説明会に600人以上が参加する様子に、一般の方々の考古学と歴史に関する熱意を感じ、印象的でした。

発掘調査以外にも、奈文研所蔵の膨大な数量の木簡、多様な研究テーマ、実地調査で訪れた大阪、東京、島根等の博物館や遺跡は、私自身の研究に大きな刺激となりました。

つたない日本語にもかかわらず、2ヵ月間の日程を無事に終えることができたのは、奈文研の皆様のおかげです。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、今後の両機関の持続的な交流・協力を願っております。

(国立慶州文化財研究所 尹亨準、翻訳 松永悦枝)



藤原宮大極殿院北門跡での調査風景